

花袋君の作と生き方（二）

柳 田 国 男

ところが田山君とその同志たちは、あたかも今日の若き作家とは正反対に、文芸がその世用の大小を計量せられることを忌み嫌った。何か対社会の使命でもある如くいわれると怒った。終始題材を自分の近まわりの、じっとしていても集まってくる区域から見つけだして、しかも決してこの方が処理し易いから、またはこの方が有効に、自分の見た真実を現し得られるからとはいわなかった。そうして世間がその以外のものを期待することを、心得ちがいのようだったのであったが、それが私には自然主義の自分からの制限であり、一種後から理屈をつけた骨惜しみであるように見えて仕方がなかった。

一方私たちの方でも、もつとも純良なる読者の要求を代表しているつもりではあったが、その実はやはり楽屋に出入する連中の、片よった見巧者というようなものに囚われて居たのかも知れない。ちょうどモデル問題などが、馬鹿馬鹿しく論議せられていた頃であった。もういい加減に家庭などを書くのは止して、もつと遠くへ出て『重右衛門の最期』のような場合に、ぶつかって見るようにするというといった。だれだって皆相応に精透なる自己の観察者だ。それを君だけの厳正な用意をもって、心のひ

だまでも引きめくって写しだそうとすれば、確実なる記録の残ることは当たり前だ。いまだ説明せられないのは、果してこの方法なり態度なりが、どこまで押しひろめてゆかれるかという問題じゃ無いかともいつてみた。あの折の気持に戻ってみることは出来ないが、何でも私は笑われたように記憶している。そんな問題ならとつくの昔、もう僕は苦しんで通り越して来ているのだ。西洋でもだれとかはもつと詳しく論じている。二つ以上ある題材の中から、特にこの方をとって取りあげたのではない。書くべく唯一つのものが与えられたのだという様なことをいって、断じてそうだなとは答えなかったのであった。

とにかく私の説き方が拙であり、またやや軽薄にも聞こえたことだけは今からでも想像することが出来る。あの際モデルに使われて腹を立てた二三の人が、ほとんど申し合わせた様にいった言葉は、事実は違っている真相はこうであった。それすら見抜くことも出来ないようでは、自然描写とやらも余りあてにはならぬ、といった様な憎まれ口であった。私は何の必要もないのに、思慮もなくそれに近いことをいったのである。君と二人で一緒に観た事でも、僕はこう解し君はああ感じている。態度さえ誠実ならたまの見損ないはあったっていいといつて、構わぬから出て見よと説くはずであったのが、却っておく病で引込んでいることを、責めるようにも聞こえたかもしれな

い。何にしても三分の一ほどしか田山君を知らない者が、出過ぎた忠言を試みようとしたことが、却って同君の自然の進路を、煩わしたことになるならば悲しいことだと思う。

もちろん自分をどこまでも見つけていようとする、深く掘りさげて泉に達するまで、もしくはその底にも潜り入ろうとするのが、強いこの人の気質であつたかもしれぬ。また平心に外部から観望しても、たしかに興味多き一つの生活であつた。遺伝にもはた境遇にも幾つかの悲劇的要素は含まれていた。しかし求めてその性情の変化展開を試みようとしぬまでも、仮に僅かでも自分を小説にした方がよいという心持が、彼の中年の平和に影響していたとすれば、私は今少しく自由なる境地において、彼を自然に成長せしめなかつたことを悔恨せざるを得ない。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めない箇所や補訂を加えた箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より